

野間宏全集

第六卷

野間宏全集

第六卷

筑摩書房

野間宏全集 第六卷

一九六九年十一月五日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
郵便番号一〇一―一九一
振替東京四一―一一三 CS 71406

本文印刷 晁印刷株式会社
製本 山晃製本株式会社

目次

わが塔はそこに立つ

3

京大事件の頃

465

わが〈へ心〉の日記

467

真如堂の辺り

476

自己の絶対性と歴史の相対性

針生 一郎

481

塔はここに

寺田 透

497

解説

篠田 一士

507

わが塔はそこに立つ

序章

一

昼の風とは違い、明らかに眼に見えると思える夜の風に乗って近づいて来るものがあるのを知り海塚は歩みを止めた。右手の百年を単位に数えなければならぬ暗い空に立つ黒い杉の木がさらに黒い大枝を彼の眼の前でありありと動かして見せるのである。

夜の風は音たてて過ぎ、何ものかに後を追われるかのよう、いずことも知らぬ彼方に去って行く。その行方がいずれの方であるかは、この夜ふけに調べるすべもないだろうが、その風の後を追うかのようにさらにこちらに近づいて来る一団は何ものの集りだろうか。海塚草一の耳にはいるのは駆けつづける騎馬隊の整った蹄の音だ。それは足並そろえて響きもたかく近づいて来る。

「追って来やがるな。しかしいくら後を追って来やがったところで、無駄なことやぜ。この俺をひとらえて、縄かなにかでぐるぐる巻きにして、いつまでもそこにひきとめておこうといっても、そんなことは出来ることではない。もう、この俺の心はちゃんときまっちゃってしまっているのやか

らな。俺は絶対に後に引返すなどいうことはせんぞ。」海塚は後から来るものたちに言葉を投稿げつけようとした。しかし彼はすぐにその言葉を口のなかにとどめて、咽喉の奥に飲みこまなければならなかった。何をおおげさなことをしてやがるのかというかのように、冷やかに自分を見ている月形の大きな眼玉をもった顔を彼は自分の内に見た。

月形のその皮膚のしまった、ととのった顔は海塚を内から烈しくたたき、誇らしげに頭上たかくかがけている破壊という大文字のはいった旗を彼の方につきつける。

「ちえッ……」海塚は自分の内にある月形の顔を追い払って、音をたてて後から近づいて来るものたちを、眼をふさぐことなくじっと見つづけた。

衆徒、僧兵の騎馬隊——馬上の、夜にもはっきり判る坊主頭をつつむ鍔のついた角頭巾、きらりと光る背中の長薙刀——夜にまぎれて黒谷別所を出、叡山に帰り行く衆中連。響きはいよいよ高くなり、ついに彼等は黒谷別所の山門に姿を現わし、夜に吹く黒い風のように、下手に立止る彼には眼もくれず、たちまちまがり角に隠れてしまった。

すでに彼等のものさわがしい物音は海塚草一の耳にとどかなかった。彼はいま自分の傍を一瞥もすることなく去って行った山法師達に冷たい笑いを投げて歩き出そうとしたが、もう一度改めて顔をあげるとともに杉の大木を見上げ、

昨年の暴風雨の機に折られて横にぶらさがって揺れている先きっぱがそのまま残っているのをたしかめた。

《行きやがったな。あたり前のことだよ。この俺をとらえることなど出来ることではない。とらえたとしても、この一たん定めたこの心を変えることは出来はしないのだ。》海塚は自分のすぐ横のところで、父親の細い身体が低く頭をたれ、両手をだらんと下げて、じっと動かずにいるのを知っていた。細長い頭をした父親はついに自分の手もとから海塚が去って行くのを、もはやただ見ているほかには、しようがなくなつたのである。《長い間、俺はこの父親の手のなかにしっかりとらえられていたが、いつかそこから自分の身をひきはなさなければならんということは、ずっと前からこの俺に解っていたことではないか。そしてただその日というものが、いま、来たというわけやないか。》夜の空気のなかで次第にはっきりして見えて来る貧相な父親の姿に重なるようにして、彼の暗い眼界に見えるのは、輪郭のしっかりした、円い精力的な顔をした、大男の潮源である。《お前達が隠していた秘密、宗門の秘密も、もはやこれ以上隠しおおせることは出来はせんぞ。俺はもう、それをつきとめている。お前たちの宗門を破りすてているのやからな。》海塚は自分の横のところにいる二人に向つて言った。

彼等は蹄の音とともに去って帰って来なかったが、彼等は夜の風音のただなかにいる海塚草一に黒谷別所の門を残して行つた。黒谷別所は叡山の別所で法然上人黒谷源空が念仏門をひらいたところであり、二十四歳の日から四十三歳まで閉じ籠っていたところである。以前海塚は父の海塚実鸞が生きていた時、父に連れられてこの黒谷に来たことがあるが、源空が専修念仏に帰した黒谷の大きな山門は、ただそれだけでその時父の頭上に重くのしかかった。

しかしいま黒谷の山門は彼の後に黒く立ちその大きな重層をもつて彼をとらえようとする。しかし海塚はこのような夜がこの自分についてやって来ることを、前からはっきり予感していたのである。この春京都大学に入学して以来、彼はこの黒谷の門をすでに、幾度かくぐつたのだが、このような宗門に対する訣別の宣言をする日が自分におとずれすることを前から考えていなかったとは言えなかった。

しかしその予感はその日は或いは彼にとつてはこの上なく恐ろしい日となるのではないかという恐怖に伴われていた。その日はたしかに彼の前に恐ろしいものの数々を呼び出して来る日であり、彼はその眼をふさぐ他ないような恐ろしい形をしたものと共にその後ずっと日をおくらなければならぬことになるのである。しかしまた一方彼はもちろんこのような予感をただちに斥けようとして、それに嘲

笑をあげせかけ、さらに嘲笑よりも一層強い効力を持つと考えられる冷たい笑いを放っていたのである。しかしこの二つの笑いはいずれも何の効果も収めることは出来ずしてついにいまその日はやはり恐ろしい形をしたものをひきつけて彼のところにやって来たのである。

その日は多くの門をくぐらなければならぬと、その予感に彼にしかと伝えていたのである。門こそはその恐ろしいものの数々に彼が会おうためにはいつて行かなければならないところである。すでに彼は京都に来て多くの門を通りがかりに見たのだが、彼が門をくぐって行くその行き

先きというのは一体どこだろうか。彼がかつて見た門といえは三間一戸八脚門といわれる法隆寺東大門、五間三戸二重門といわれる大徳寺三門、当麻寺山門、法然院藥韋門、などとまったく数多い。しかし彼がこの日くぐらなければならぬ門は、これらの寺院の門のように南大門、中門、総門、三門などの方位を持たず、また重層、単層その他あらゆる形を備えず、また柱門、戸口などの規模一切なく、しかも彼の前に厳然としてつつ立っていて、汝、ただちにこの門をくぐれと彼に向って呼びかけるだろう。

海塚草一は学生服の上衣の右ポケットをおさえて、そのなかにはいつている筈の、今朝月形が速達をもって送ってよこした絶交状をたしかめた。二つに折った厚い封筒がポ

ケットの上から彼の手にあたえる固い手ざわりを彼は感じとるべきだったがそこには彼の予想していたものとはなかった。彼は出がけにその封筒をポケットに収めて出ようと思いつきながら、つい、他の方に心を散らし机の上に置いてきたことを忘れていたのだ。「僕は否定する！ 否！ 断じて否定する！ 否！ 否！ 徹底的に否定する。」海塚はその封筒のなかのこの言葉がいまも自分にとどめを刺そうとするかのようにそのするどいきつきを自分に向ってつきつけて来るのを知っている。

《しかし月形のこの角ばった、しゃちほこ立ちした言葉の下に隠されているのは、彼奴のしつとにすぎんやないか。俺にはそれがよく解る。それが解らんような俺ではないよ。俺は彼奴を絶対に許さん。彼奴に絶交状をだされてひっこんでゐるなんてことは俺はせんぞ。しかしこの月形の絶交状と対決するためにも俺は宗門との絶縁を実行しなければならぬのだ。》

《いや、俺がいま宗門に対して発しようとする絶交状は、月形が俺によこしたあの絶交状とは別に何の關係もない。宗門から別れるというこの俺の考えは、前から俺がたしかめて来た考えであって、決してあの月形の野郎の破壊主義などにおされて出て来たものではない。俺はこのことだけははっきりさせておかねばならない。たしかに月形の

絶交状を受取ったのは今朝のことで、俺が宗門に対する訣別の宣言を発するのは、今夜のことであるが、この二つの間には何の因果関係もないし、また何の影響関係もない。』

海塚草一は黒谷別所の石垣にかこまれた場所を後にして左方に道を取り、ようやく暗い街燈の立ちならんでいる住宅の前に出た。夕食をはずしたので彼の身体はしきりに空腹をうったえつづけていたのだが、彼はその家並のはしっこのところに燈をともしたうどん屋の食欲を誘う赤い看板提灯を見つけてもなかにはいらなかった。彼はその前を通りすぎ、彼の闇になれすぎた眼をまぶしく照す大通りの方にはいつて行った。

彼のいま求めるものは燈火であり、明りだった。彼はただその明りをめざして歩きつづけた。彼は自分がいまあの重層、単層などの形を持たぬ恐ろしい門をくぐろうとしているのを知っていた。その柱間、戸口のない門は彼が先刻後にした黒谷別所の門のように夜のなかに黒々と立ってはいず、むしろ次第に彼の足元に明りをひろげて来る大通りの店々のなかから放たれる照明のような輝く明りのただなかに立っているのだ。彼はそれがすぐ自分の近くのところにあることをよく知っている。彼には先刻後を追ってきたあの一隊の黒谷の衆徒たちが後に残した夜の風が、いまこれから自分がくぐろうとしているその門のなかに消えて行

ったこともよく知っているのだ。そしてその門の口のところ辺りにはすでにあの顔のない男たちや頭のない女たちのうめく姿が見えてきているではないか。

彼等はまるで遊廓の前に立つ齒のぬけた、しかし滑稽なやり手ばあのように道を行く彼をその門のところへと誘いよせようというのだらうか。しかしいかに彼等がその限りない生前の罪障によって日々炎を喰う苦しみを受けなければならぬかをその細々とした哀れげな声で訴えつづけようともそれはいまの彼の前に何ほどの効果もみせるものではないだらう。とはいえ彼等は一体この自分にそのような効果のないことを十分知っていながら何をいつまでも訴えようとしているのかと彼は一軒のまだ表を開けている八ッ橋屋の方に歩きながら考えた。……彼等はあの「往生要集」の赤い表紙でとじられた厚い書物の紙の重みのなかからはい出て来たものたちなのだ。……海塚草一は父から伝えられた恵心院源信の「往生要集」の開巻第一の言葉を口のなかで静かに読んだ。

大文第一 厭離穢土の事

それえんりえどというは、けがらわしき土をいとい離るる事なり。此の娑婆世界を初め、六道ことごとく穢土也。総て是を三界といえり。三界は安き事なし。猶火宅のごとしと仏ときたまいて、火の中を宅としていたる如しと也。

最も厭離すべき者なり。今その相をあかすに総じて七種あり。一つには地獄、二つには餓鬼、三つには畜生、四つには阿修羅、五つには人間、六つには天人、七つには総結なり。第一に地獄は又わけて八つあり一つには等活、二つには黒縄、三つには衆合、四つには叫喚、五つには大叫喚、六つには焦熱、七つには大焦熱、八つには無間なり。

第一等活地獄の事

一つに等活地獄とは、此の閻浮提しやばすかの下一千由旬にあり。たてよこ一万由旬なり。此の中の罪人たがい常に害心をしていて若しまたまた逢いみれば獵人の鹿にあえるが如し。おのおのくろがねの爪をとぎたてて、たがいに眼をつかみ、肉を引き裂き、血流れ肉尽きて、ただ骨ばかり残る。或は獄卒、鉄棒をもつて頭より足まで、あまねく打ちひしぎ、身体破れくだくる事砂の如し。或は極めて利き刀を以て分分に肉を切り裂く事、厨者の魚肉を切るが如し。

まったく恵心院源信はむつかしい字をつかいやがったものやな。だからしてこれを親父に全部空でいえるように勉強せよと言われた時には、ほんまに、そんなことがはたして出来るものかな、一体、どうなるのやと思ったぜと聖護院八ッ橋の赤い鐘をならべている店先に立って海塚草一は自分に言った。「八ッ橋一つ……」海塚は自分の声が余りにも小さくてききとれなかつたらしいので繰返した。

一人の少女が彼の前に立っている。彼女の少し横に長く切れた眼は生きていて彼の眼をさそうかのようなのである。

「おいぐらのに? ……しますか?」

「さあ、いくらといくらとありますか? この鐘のいいですが……」彼の眼はしばらく肩のはっきりひかれた、鼻筋の氣持よく通った細い長形の少女の顔から離れなかった。

彼は少女の顔の横に吉羽高江のあの額の高い顔を置いていたのである。彼がはじめて吉羽重実のところであの高江に会った時、高江は丁度この少女の年頃だったのだ。いや、その時高江はすでに少女という状態を越えようとしていた時だったのである。彼女は木の幹に新しく生い出た細い木の枝か何かが空に向って真直ぐにつき出るように彼の方に真直ぐにつき出ているといえるのだ。彼はその自分の方に真直ぐにつき出ている高江をそのまま彼のうちに受け入れ、つつみ込みさえすればよかったのである。しかしいまでは彼女は彼を拒否する自由な意志をもっている、彼に対立することの出来る、大人であり、かたくなにその対立を主張しつづける女性である。

「はい……、鐘入りは大、中、小と三段になっております。でもすぐにおたべやすなら……お焼きしますえ……」少女の口からすらすらと全く抑揚の少ない京都弁が出されると、この少し自分からは遠いところにあるなと思えた

とのいすぎる容貌の少女が自分のすぐ横のところに近よって来るのを彼は感じた。彼は大阪弁を入れて答えた。

「ほう、焼いてくれるの？ それは知らなかったな。焼いてたべるんですね？」

「おうち、京都やおへんの？ ……はい、焼いて食べます。焼いて食べると、それは口のなかでぱりっとなつて裂けて、ほんに口あたりがよろしいとみなさんに、言うて頂けます。」その焼いて食べるといふ以下はすでに何度も繰返して来た言葉にちがひなかった。彼女の顔はそれを言う時、その表情を失った。

海塚は一番小さい罐入りを貰いたい、歩きながら食べるのだと言った。彼は一番小さい罐入りと言うときわざと声を大きくしなければならなかった。ピンクのセーターをつけた少女はその怒ったようにつくった彼の調子にくすりと笑ったが、すぐ商売言葉に返ってよろしゅうございます、いまお食べやすのなら、罐入りのものでなくて、バラ売りのにいたしましよかと言った。彼女は赤い包紙の上に炭酸紙をかぶせた罐入り八ッ橋の高く積みあげてある陳列台の向うにしゃがみ込んで一時その姿を消した。やがて彼女のピンクのセーターがもとのところに現われるとその手には小さな七輪がかかえられている。

高江と自分との関係ももはやたち切られたと海塚は考え

ていた。それを回復する道はとざされてしまっているのである。「もう、来ないで。」といった高江の言葉は彼の内に強く刻み込まれている。彼が最後に彼女のところを訪ねたのは一カ月ほど前のことであるが、彼が「もう来ないで。」という彼女の言葉を聞いたのは、この時が最初ではなかった。しかしこの時彼はその言葉に彼女の全身の力がこめられているのを知られたのだ。そして絶望の調子のまといつたその彼女の言葉は、いつも彼女の家に向おうとする彼の足をとらえて、たちまち土の上に釘づけにしてしまうのである。……高江はいまははっきりと知っているにちがいない。彼が求めているのは決して高江自身などではなく、彼の傍で高江の固い身体を通過するけいれんのように烈しいおののきだけだということを。……彼は自分の前の少女とはちがつて空色のセーターを着けている高江の胴の長い身体を思い出した。

少女は陳列台の上にあいている小さい空間のところに七輪を置き横の棚のブリキ罐から何枚かの八ッ橋をとって金網の上にのせ、ばたばた下をあおいだ。するとたちまちこうばしいニッケイの香が貧しい、すでにひびがはいって針金でしめてある小七輪から立昇り、いままで暗い店のなかに満ちていた、湿ったような冷たい和菓子匂いを次第に追いはらって行った。彼は少女の白い手の握った白木の箸

の先が次々と黄色の短冊形の八ッ橋を、まるで魚か何か生ま身のを返すように、つまんでは返すのを見た。

彼は少女のそのまゝの手が自分の手のなかにはいつているのを想像してみた。高江の手は決してやわらかい手ではなくその指も太かったが、少女の手もよく見ると高江の手に似ていて太い指をしているのである。その手はしかしあの高江の手などとはちがって、彼の手の中で冷たく全く何の反応も示さずにいるということはないだろうと思える。

彼女は七輪の方に向うと急に仕事にとりかかった仕事熱心な大工か何かのように口をきかなくなった。彼にはそれがものたりなかったが、一方彼女のそのよく働く手は、それを十分補って彼の心を満たすのである。彼は眼をあげて高い天井の梁のところから横に取られた暗い電球の光によって、店の奥のそれほど広くないむきだし板の間が、破れ障子一枚をへだてて家の居間につづいているのを見届けたが、すぐ眼を再び少女の動く手のところにもって行った。「八ッ橋というのは、どうして出来たんだろうね。」海塚は自分の視線がずっと彼女の上にあることを彼女に知らせなければならぬと考えてついに言った。

「八ッ橋の由来でしようか……」少女は活きた眼でちらと彼の方を見て、すぐ七輪の方に面を向けたまま、「お婆ちゃんに聞いたところですけど。」と前置して話した。

「八ッ橋は八橋流箏曲の始祖八橋検校の供養のお菓子といえます。福島の方に生れ江戸に出て筑紫流箏曲を習い、京に上って完成し八橋流を開かれた大検校様です。検校様は貞享二年におなくなりになり、この上の黒谷墓地に葬られたのですが、検校をいつまでも慕い墓参するもの跡をたたく、ついに墓参者の記念に琴の形をかたどった菓子をつくり、検校の名を上につけて、売出したといえます。」

少女は表裏ともに火をあててびんと張った短冊を、ひろげた白紙の上の一つ一つとり出し、たくみに瓦のようにならべて重ね合せた。ここにもまた黒谷があると海塚は自分に言いながら、畳の上に置いた箏（こ）の前に坐り指にはめた爪の根に口でしめりをくれている母親の横顔をちらと頭に浮べた。……たしか小学校の四年の時だったが、彼は母が京都の土産に買って帰って来た八ッ橋を食べたことがある。カリカリせんべいと同じようなものじゃないかと子供の彼は植物採集の緑色のブリキのカバンのようなものを胸にさげて、カバンの横からつき出た小さいハンドルをカリカリと音たてて廻し、子供に売りつけて行くカリカリ屋のせんべいと八ッ橋を比較した。子供の彼には二つの短冊型をした菓子がただ短冊型をしているだけで似ているように思えたのだ。しかしカリカリせんべいと八ッ橋とは全く似ても似つかないというものではないか。カリカリせんべいは揚

げてあるのだが八ッ橋は焼いてある。

そうじゃない、たしかにこの二つには形が似ているという他に似ているものがあつた。それはあのニッケイだ……カリカリせんべいにもニッケイがはいっていたが、この八ッ橋のニッケイはまったく顔を一つんで来るほどである。

……しかし小学四年の彼はその八ッ橋の箱の上に書いてあつた聖護院という名前の言葉を頭に入れることが出来なかつた。彼はそれを母に尋ねて、それは聖護院という土地の名だと教えられて、それでもまだのみこめず、いつしか忘れてしまつていたのだが、その聖護院八ッ橋の背の高い製造販売所の建物はすぐこの大通りのこの店の並びにある。それは夜にははやく店をしめてしまつて營業しない。そしてここがその聖護院なのだ。

ここにもまた黒谷があると海塚はもう一度自分に言つておいて、再び金網の上に八ッ橋をひろげる少女に質問をかさねた。「この八ッ橋の製法は？ 八ッ橋はどうしてこしらえるの？」

「製法？ それは秘密ですわ。」少女は七輪の方を見つめたまま、大人のようにもつたいぶつた口調でいい、顔をあげてお下げにして後にたらしした髪を左右に、尻尾のように振つた。「製法わかりたいんですの？ それじゃあ、さしつかえない限り言いましょうか？」

「そんなに製法というのはひとに言えないもの？」

「ええ、製法は八ッ橋造りには一番大切なもの、この家につたわる秘伝だとお婆ちゃんがいわれてます。うちは同じ聖護院でも、マークがちごうてます。」

「マークがちがうの？」

「マークがちごうてますように、製法もあちらの聖護院さんとは、ちごうてます……」

少女は口を閉じて再び七輪の方に返つた。彼女の顔はすでに急変して硬くきつくなりその内部の緊張をむき出しにしているのだ。それは彼女のこの小さい店を上からおさへつづけているこの並びにある聖護院八ッ橋製造所に対するくやしきのまじつた心を、おさえることの出来ない少女の顔にちがひなかつた。

海塚は不意に先ほど自分の口が声に出さずに誦した「往生要集」の次の句が自分の口のところで動き出して来ているのを知つた。

「涼風ふき来れば、よみがえりて本の形となり、又たちまちに前のごとく苦をうくるなり。或は声あつてこのものもろの有情還つて等活すべしといひ、或は獄卒くるがねの、さすまたを以て地を打つて活々と唱ゆるという。」

「原料は何なの？」海塚は口の辺に動くその「往生要集」をはらひのけて聞いた。

「原料はしん粉です」

「しん粉というと？」

「しん粉はしん粉やおへんか。しん粉をお知りやおへん？」

……そう白いお米の粉よ……」少女のくどいわねというような調子はまるで小学生のような彼女の素肌を急に彼の前につきつけたかのように海塚を彼女から引離した。

「ああ、しん粉細工のしん粉だね。それだけですか？」

少女は彼の言葉に全く反応を示さなかった。「それに砂糖とニッケイと罌粟^{けし}。罌粟は入れはるお店と入れはらへんお店といろいろありますけれど、うちのにははいっております。」少女は焼き上った八ッ橋を白紙に包んで彼の手の上にのせながら、最後に八ッ橋を練る水加減と焼く火加減がとてもむづかしいといい伝えていきますと付け加えた。

海塚はそれに答えるのに、ただ代金を手渡すだけにした。彼は有難うございましたという少女の言葉にも何の言葉も返さなかった。彼の口の中には、何か堅いものを噛んだ拍子にぼろぼろと口の中で抜けつつけて、たちまち口一ぱいになってしまった夢のなかの歯のように、ただ「往生要集」の言葉だけが一ぱいつまっていたのだ。

「人間の五十年を以て、四天王天の一日一夜と為して、其の寿命五百歳なり。四天王天の寿命を、此の地獄の一日一夜として寿命五百歳なり、殺生したる者此の地獄におつる

なり……」

二

海塚草一は焼きたての八ッ橋を一枚一枚口のなかに放り込んで食べながら、急に暗くなりだした街の明りをたどって歩いて行った。彼は八ッ橋屋が彼を最後の客として彼の去ったすぐ後で店をしめ戸を降したのを知っている。彼はレールの上をきしめるその戸の音を耳にした。八ッ橋屋の隣の荒物屋も彼が八ッ橋をつつんでもらっている時、それと同じような音をたてて表をしめたのである。彼はびしりと店の板戸が打ち合う音をきいた。店の燈は一つ一つと消えて行く。このはやくから燈を消してもっぱら節約をはかる京都商人たちの店の前にもし明りを求めるとすれば、ここを捨てて辺り一帯おそくまで店をあけている三条の方に下るか、それとも横にそれて両側に長くつづいている二階屋にはさまれた道をたどり熊野神社前の方に出て行くほかないのである。

海塚は三条へ出てそこから中京の高江の所に行くことをちらと考えたが、もちろんそれはただ考えたというだけのことだった。彼の足の方は彼の考えなどに従いはしないのである。彼は高江の母親がすでに高江から二人が別れることになったことを聞かされているに違いないと考えると、

自分に好意を持ってくれている彼女の母親に自分の口からそのことについて話さなければならぬ、そして二人の關係にはつきりけりをつけるようにしなければならぬと思うのだが、彼の足は高江の方へはむきはしないのである。

いや、今夜のような時に高江のところに行くことはない、と彼ははっきり心に決めた。今夜は彼にとつては全く重要な夜なのである。彼はむしろこの夜をただひとりで過ごして、自分の考えるところをさらに明らかにしなければならぬと考えてこうして家を出て来ているのではないか。それを放つていま頃から高江のところに行こうなどと考えるというのは、何ということなのだ。そのようなことで一体この俺にこれから何が出来るというのだ。

《今夜という夜は俺が宗門と別れなければならない夜なのや。》海塚は自分に言った。《俺の文学がそう俺に命じているやないか。》彼は自分の決意を自分につきつけておいて、自分の加わっている同人雑誌の仲間の安原や木庄や三駒たちの顔を一つ一つ思い浮べた。しかし彼等が今夜の彼のこの決意を知ったところで、彼等はそれにはたいして何の感動もまた何の感興も示すことはないと思えた。彼はこれまでに一度も自分が或る宗門の信者であることを彼等に告げたことはなかったが、たとえそれを告げたとしてもそれは彼等の関心をひくわけはなく、したがって彼の宗門に対する

訣別の決心などもまた同じように全然彼等の心にとまるとなく消え去るものと考えられるのである。彼はただ自分ひとりでこの宗門との訣別をすすめて行くほかはないのだ。《今夜はどうあつても俺は宗門と別れなければならない。

俺の唯物論がそう俺に命じている。》海塚は再び自分に言ったが、たしかに彼にそれを命じているのは、彼の唯物論なのである。そこで彼は「資本論」の読書会で会う松崎や、由畑や、広島などのことを思い浮べてみたが、もちろん彼等もまた彼の宗門のことについては、それほど興味をもつて、耳を傾けてくれるとは考えられなかった。或いは由畑はどうだろうかと彼は顎の長い眼のおちくぼんだ由畑のことを考えたが、彼は由畑とは松崎のところで一度会ったきりで、まだそれほどしたいとはいえなかった。

彼は彼の宗門にかんする限り、それについて話をするこの出来る相手を一人も持つてはいなかった。彼はやはりあくまでも自分ひとりでこの問題を解決するほかにはない。しかしこのことはいまここで改めて考え直すなどしなくとも、すではっきりしていたことではないか。……彼は考えたが、やはりこのように結論をくだす自分自身に向つて言わなければならない。《俺は決しておそれなどいはいしないよ。俺は宗門外のものにたいして宗門のことをしゃべってはならないという宗門の掟に、しばられたりし

ているのではないぞ。』

海塚は自分の心が命じるままにやはり下宿への道を行かず熊野神社前への道をとって歩き出した。彼は聖護院にまつられている本尊はたしか不動明王のはずだったがと思いつながら、毎年大峰山に向う修験道の山伏たちがここに集り出発するという聖護院の建物のある辺りに眼をやった。が、月のない暗い夜の空気に彼の視界はさえぎられ、その大きい建物の影はまったく見えなかった。彼がふと自分の傍に誰かいるような気配を感じてふり向くと、背の高い瓢箪形の顔をした一人の男が彼について来るのである。

「君か。」と彼はその前からよく知っている男に声をかけたが、男は全く素知らぬ顔をして答えようとしなない。

「君が出てくるなんてまったく馬鹿げたことやな……」と彼は八ッ橋を食うのを止めて、黙っている背の高い男にさらに言った。

「それですかね。」男はようやくにして顔をまわしてじろりと彼を見た。

「そうだよ。」彼は男の眼を自分の眼がさけないように身体に力を入れた。

「しかし君は恐れてるじゃないか……」男は再びそっぽを向いたまま言った。

「なにを恐れているって?」

「そう、恐れてるな。」

「だから何を恐れているときいてるやないか。」

「なにもかも。」

「なにもかも?」

「もう言わなくてよいだろう。」

「何を言うんだ。お前がどんなに横合よこあひから、出て来やがったって、俺は恐れはせんよ。俺はお前が現われるのをさっきから待っていたんだからな。それに俺はお前がいかに元に戻れと説得しようが、そんなことで説得されることはないよ。……え、そんなことを言うのなら、俺はもうお前のいうことなど聞かんから、すぐにも消えて行ってしまう。」彼は男の方を放りだして、そのまま行ってしまうとしたが、すると男の方が急に態度をかえて、まともになった。「どうして、黒谷に行った?」男はいまは真直ぐに彼の方を見つづける。

「散歩やないか。」彼はこの狡猾な背の高い相手をじっと見返した。

相手は今度はそっぽを向くことなど全然知らないかのようになり、その顔をぐっと彼の方につきつけて来る。「散歩で毎晩、黒谷に行くのか。」

「毎晩ということはないけれど。」

「このところ毎晩じゃないか。黒谷で何を見た?」